

サッチャンの四角い空

植物人間との闘い

読売新聞記者

梶田欽志 著



井っちゃんの四角い空

植物人間との闘い

読売新聞記者 梶田欽志 著

著者略歴

梶田欽志（かじた きんし）

1934年 大阪府吹田市に生まれる。

1957年 東北大学英文科卒業。

読売新聞社入社。

現 在 編集局地方部主任。

サっちゃんの四角い空

——植物人間との闘い——

定 価 900 円

1978年1月17日 初版発行

1980年5月27日 第4刷発行

著 者 梶 田 欽 志

発行者 阿 部 康 治

発行所 株式会社 溪 声 社

〒113 東京都文京区本郷 2-25-6

TEL (03) 816-5375 (代)

印刷 新興印刷 製本 石津製本 © 1978 Kinshi Kajita

乱丁、落丁本はお取り替えます 0095-2200-2002

サッちゃんの四角い空

—植物人間との闘い—

岩館 幸子（いわだて さちこ） 十五歳

盛岡市山岸大平二十六番地。四十八年九月十三日、小学校三年のとき自宅近くで暴走タンクローリーに脳を砕かれ、盛岡日赤病院で難手術のあと植物状態に陥った。当時八歳。

自分の血を頸（けい）動脈に送り込む「衝撃療法」を受け意識を回復、その後の『奇跡』的な回復ぶりが世界の医学界の反響を呼んだ。五十一年十月六日、病床での授業開始。五十四年三月、病院内の盛岡市立仁王小学校日赤分校卒業。

五十五年一月現在、岩手県花巻市の岩手労災病院で社会復帰のための機能回復訓練を続けている。岩手県立みたち養護学校中学部一年（訪問教育）に在籍。

写真提供↓読売新聞写真部

目次

もくじ

四年目の秋	7
つぶれた脳	21
深夜の地獄	33
微かな反応	47
忍び足の実験	57
チャンネル争奪戦	71
喉頭の注射だこ	81
校庭の車椅子	95
越えた八つの峠	112
世界に波立つ反響	123

無邪気な案内人 137

二十六枚目の卒業証書 153

七宝焼の指輪 173

新たな旅立ち 189

あとがき 203

1

四年目の秋

厚みを増した病床日誌と経過表が、過ぎた永い歳月を刻んでいる。

表書きに「患者三六九九号——交通事故。頭蓋骨開放性陥没骨折、脳挫傷、硬膜裂傷。岩手県盛岡市山岸大平二六番地、岩館幸子。生年月日・昭和三十九年十二月十八日」と記されている。

昭和五十一年十月六日。季節はずれの一つの「新学期」が、周囲の祝福を受けてさわやかにスタートした。

それは異例の英断が演出した光景でもあった。舞台は盛岡市街の中心部にある盛岡赤十字病院、

いわゆる盛岡日赤の外科第二病棟二一五号室である。

この日、秋たたけた日本列島は北から南の果てまで、眩しく光る青空が透明な広がりをもて、新聞の夕刊は、

日一日と深まる秋。そのかわり寒気を含んだ移動性高気圧の張り出しで、朝の冷え込みも厳しく、この秋一番を記録した。北海道や日光戦場ヶ原で初氷、箱根など関東地方の山間部でも初霜の便りが聞かれた。

と報じた。みちのく岩手県地方も、快晴の空が明け染める前に、早霜が山沿いの景色をうつつらと白く刷^はいた。

その夏、戦後最大の大冷害に襲われ、稲作の収穫見込み指数が平年比八十四と北海道に次ぐ打撃を受けた米どころ岩手では、一足飛びに近づく冬に農家の表情は深刻だった。

だが、病室「二一五号」を取り巻く小さな秋は、これから始まるドラマへの期待に興奮で膨れあがっていた。三年前から入院中の十一歳の少女が、「奇跡」という名の舞台に上がろうとしていた。

——四十八年九月、小学校三年生のとき（当時八歳）、自宅近くで暴走してきたタンクローリーに脳を砕かれ、「植物人間」になった。いっさいの反応を失った小さな肉体が、病院のベッドでただ眠り続けた。そのサッチャンが植物生理を脱け出して「人間」を取り戻したばかりか、教育への可能性を抱かせるほどに驚異的な回復をみせ始めたのは、五十一年春先のことである。

小野寺英樹。四十四歳。盛岡赤十字病院脳神経外科部長。サッチャンの担当医である。その小野寺部長が「忘れられないある光景」を振り返る。

「あれは三月七日だった。二十三回目の衝撃療法をやった直後です。病室へ回診に行くと、ぼくを手招きしたサッチャンが同室の患者の方をそっと指さし、頭の上で右手を三、四回まわすんです。あのおじさんはクルクルパー、というわけなんだね。変な仕草や面白いことばかり言って笑わせるので、それをぼくに教えたんです。このとき、よし、これはいけると思った。暗く長いトンネルを脱けて、あの子がやっと自分の意思を表現できるところまできた。学校にやろう、次は教育だ、と思った。うれしくて、目頭が熱くなったのをはっきり憶えている」

盛岡赤十字病院には、長期入院の子供たちのための学校が併設されている。市立上田中学校の日赤分校と、市立仁王小学校日赤分校で、ともに岩手大学付属。別に校舎やグラウンドがあるわけではないが、各二人の教師が児童生徒の病状の推移を診ながら、あるときは枕もとで、あると

きは養護学級の部屋に集めて授業をする。晴れた日の「体育」は病院の屋上で、雨天の日は廊下の片隅に代わる。入院前、その子が在籍していた学校・学年の進度に従って、週何十時間というカリキュラムが組まれている。

小野寺部長の意図は、この分校へのサッチちゃんの転校にあった。関係方面への奔走が始まり、協議が積み重ねられた。

当時、サッチちゃんが在籍していた米内小・中学校の谷藤欣一校長（現在は盛岡市立大田東小学校長）、市教委の佐藤晋指導課長らの熱意が、こうして五か月後に実を結ぶことになる。

谷藤校長の説明によるその経過。

「病院の小野寺先生から、サッチちゃんに意識が出て機能回復の兆しが見えてきたので勉強させたら効果が上がるんじゃないか、という話があつて、私も積極的に動いた。転校が無理なら、在宅訪問という制度もありますから。」

市の判別委員会、これは身心に障害を持つ子の進級について専門委員が審査する機関ですが、ここに書類を提出し、仁王小学校の校長先生にも受け入れへの協力を頼みこんだ。なにせ初めてのケースなんで時間は食いましたが、みんなが前向きに取り組んで……。

結果としては、病院に分校があつたことが問題を解決させました。この種の施設がなければ、

むつかしかったかも知れません」

学校教育法施行規則の第二十七条（修了又は卒業の認定）

小学校において、各学年の課程の修了又は卒業を認めるに当たっては、児童の平素の成績を評価して、これを定めなければならない。

「法律では何日授業に出席しなければならぬという規定はなく、仮に長期欠席でも該当児童の進級、卒業は学校の判断に委ねられる。サッチャンを何年生にするか、も考えた点ですが、三年二学期の初めまでは通学したので、四年生になってもらいました」

転校手続きの完了は、分校の小学校の児童数を十一人に増やした。本来は高学年を和山イセ教諭、低学年を菊池公郎教諭が担当するが、「サッチャンには二人がかりで」と決まる。科目はとりあえず「国語」「算数」「音楽」に限り、週二、三回が予定された。

異例の新学期は、こうして幕を明けた。

十月六日午後二時、臨時教室に変わった病室二一五号。三人の相部屋である。和山、菊池両教

論が交互にベッドわきに立った。

座椅子にもたれた硬く不安定なサッチャンの上半身を、背後から太い二本の腕が支えていた。母親マツエさん（五十二歳）である。左半身の麻痺^{マヒ}は、まだサッチャンに自分の力で起き上がる自由を許さなかった。言語障害もひどく、声が言葉を造らない。もつれる舌の奥底からしぼり出す「アー、アーッ」という声が、唯一の感情表現だった。意思を伝えるのは、もっぱら右手である。いくら力をこめても、それ以外の筋肉は萎えていた。短く刈られたおかつば頭も、絶えずフラフラと揺れた。

最初は平仮名と三年生までに習った漢字の復習——「あお」と書いた画用紙を、和山先生が手に掲げた。病室内をキョロキョロ見回したサッチャンは、窓の外に広がる冴えた秋空を指した。次は「赤」。テレビの上に飾られた人形のスカートに、人差し指が向いた。

「サッチャン、よく憶えているじゃない」。小柄な女教師の声が弾^{ハジ}んだ。四十九歳のベテランで、豊富な教壇歴を持つ和山教諭ですら、初めて踏み込む教育の領域であった。授業開始に先き立って、こんな言葉を私に洩らしていた。

「特異なケースで、分校でも扱った例がないもんだから、何をどんな方法で、どの程度教えたらいいか、随分迷った。寢床に入っても、バスの中でも、それが頭から離れず、十日ほど、そ

ればっかり考えていました」

この朝サッチちゃんに贈るべく、自分の手で縫った三つのお手玉を携えたのが、その胸の内を代弁していた。それだけに、喜びが思わず口をついて出たのだろう。

「目」「口」「手」「耳」から「鼻」「頭」「黒」……次々に換えられた漢字が、重い過去をひきずる小さな脳の回路を少しずつ照射していった。しかし、懸念された記憶の空白はなかった。決して機敏ではないが、指が確実に正解を返していった。

画用紙の字が「母」に変わったとき、サッチちゃんは座椅子の後ろのマツエさんの方を顎でしゃくり、ニコッと笑った。

実はこの日、実験的な授業を見つめるいくつかの目があった。小野寺部長ら医師団と外科の看護婦、同室の入院患者のほかに、カメラを構えた報道関係者の姿も混じった。十数人の人垣が、ベッドを遠巻きにした。固唾をのむマツエさんの顔は、その輪のいちばん端にあった。

注がれる多くの視線に、サッチちゃんは初めから照れぎみだった。日頃のお茶目な表情は消え、緊張している様子が手に取れた。「母」という字に丸い顎をしゃくったのも、精いっぱい照れ隠しだったが、そのいじらしい仕草は、サッチちゃんに「少女」の感情が蘇った証でもあった。

次いで音楽。菊池教諭がレコードを回す。最初のピアノの旋律には首を横に振った。もう一枚。